

巻 頭 言

共同研究は楽しいものである。それなりに時間は取られ、日常普通ではない努力は必要とするものの、達成された後の充実感は個人的な論文執筆とは違ったものがある。私は今まで数多くの共同研究の機会にめぐまれてきたが、手法において対極的であり、しかもそれぞれに有意義であった二つの事例を代表的なものとして挙げるができる。

その一つは静岡在住の時、静岡市近隣の研究者が集まって行った「江談抄研究会」である。平安時代の大家大江匡房の談話を記録したこの説話集は、誰もきちんと読み解いてはいないものだった。説話・漢文学・日本史学、その他あらゆる知識を動員しなければ読み解けない書だったからである。毎週一回定期的に集まり、事前の発表準備、その後の原稿整理はたやすい作業ではなかったが、若さにまかせて乗り切ったと言える。十年をかけた成果は二冊の書となっている。

その二つは馬淵和夫先生主催の説話研究会である。これは月一回のペースで今も続いている。新発見の文献（当然写真で読む）を下準備なしに読み解いてみるという方法である。もっとも若い研究者の中にはきちんと下調べをしてくる人もいて、それなりに勉強にはなるのだが、義務としての調べではない。結局衆知を集めて難読の文字を読み、意味を解しようという作業がその場の仕事となる。それぞれに別の守備範囲を持つ研究者が違った眼によって読む、これがこの共同研究の良さである。思いがけない発見がそれぞれの中に蓄積され、発表はそれぞれの責任ですればよい、そういう自由さが、今も私をこの研究会に引きつけているのである。言文研の共同研究も即効を求めぬものでありたい。

1998年2月

言語文化研究所
所長 田口和夫